

令和7～8年度企画展

おおいた 鉾物資源

—考古学から紐解く鉾物の歴史—

ものがたり

解説
資料



令和8年

【豊後国遠見郡鶴見七湯延記】 大分県指定有形文化財 大分県立歴史博物館 蔵

2.10_火-5.24_日

大分県立埋蔵文化財センター BVNGO 大友資料館企画展示室



羽田遺跡 姫島産黒曜石大型石核
国東市教育委員会 蔵



四日市遺跡 弥生土器 甕



原遺跡 短刀
国東市教育委員会 蔵



岡藩銭座跡 寛永通宝
竹田市教育委員会 蔵

主催 大分県立埋蔵文化財センター

後援 大分合同新聞社、NHK大分放送局、OBS大分放送、TOSテレビ大分、OAB大分朝日放送



大分県立 埋蔵文化財センター
TEL 097-552-0077 FAX 097-552-0700



HP



Facebook



Instagram

大分県は、海、山が織りなす複雑・多様な地質環境から、多種多様な鉱物資源に恵まれ、人々は古来よりその資源を利用してきました。

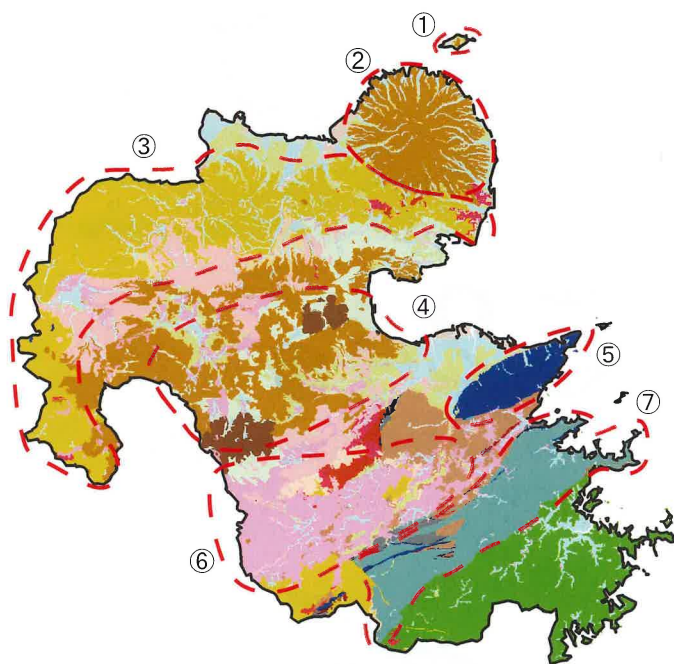
本展では、遺跡から出土した資料から鉱物資源の生産、流通、消費の過程をたどり、鉱物が遺跡でどのように姿を変え、人々のくらしや文化にどのように関わっていたのかを探ります。

豊の国を支えた 大地の恵み

大分県は九州の北東部に位置し、面積は約6,340km²で、山地がその79%を占めます。

海岸線は瀬戸内海西端部の周防・伊予灘から豊後水道に面し、国東半島が瀬戸内海に大きく突き出し、別府湾は深く西側に入り込み、佐賀関半島から南は入り組んだリアス海岸がみられます。

山地は北西部に英彦山^{ひこさん}、西部は九重連山^{くじゅうれんざん}、南部は祖母・傾山系^{そぼ かたむきさん}の山が連なり、内陸部には火山地形や盆地が広がります。こうした地質的特徴が、豊富な鉱物資源を産み出すこととなりました。



出典：産総研地質調査総合センター、
20万分の1日本シームレス地質図V2(<https://gbank.gsj.jp/seamless/>)から
大分県域を抜粋し加筆。地質図の凡例詳細は、上記URLを参照。
地図に表示された各色は、大分県内の地質を区分したものです。

各地域における鉱物資源の特色

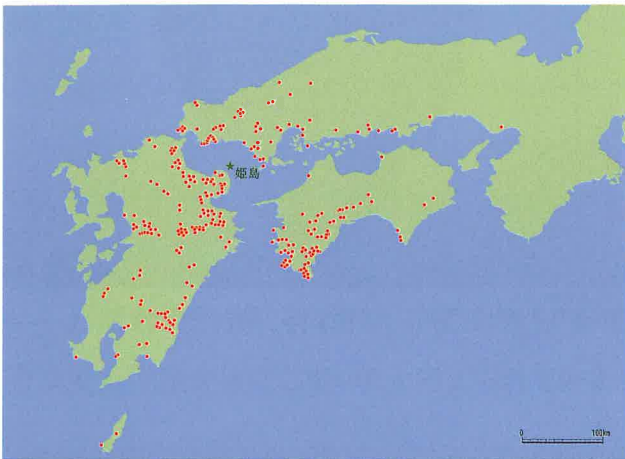
- ① 姫島では、火山活動などにより形成され、国指定天然記念物の黒曜石などが産出されました。
- ② 国東半島では、高チタン砂鉄の鉱床として鉄の生産がさかんでした。
- ③ 県の北部（日田市、中津市、宇佐市、杵築市など）では、数百万年前の火山活動で形成された火山岩が広く分布しており、これに伴い、金・銀などの種類豊富な鉱物が産出しました。
- ④ 別府～くじゅう連山にかけての地域には、火山や温泉が多く分布し、温泉や噴気活動に伴って形成された硫黄や明礬などが生成します。
- ⑤ 大分市の佐賀関周辺では、変成岩中に銅を含む鉱床が形成され、緑色片岩などが産出されました。
- ⑥ 大分県の南西部（竹田市、豊後大野市、臼杵市など）では阿蘇山の火砕流などによる溶結凝灰岩を中心とする地質構造が形成されました。溶結凝灰岩の耐久性や加工のしやすさから、中世～近世を中心には石造物の材料として利用されました。
- ⑦ 津久見市～臼杵を中心に石灰岩の鉱床が形成され、現在も続く、石灰岩を利用した産業が盛んでした。



地図が示すように、
大分県は多様な地質によって
成り立っているね。

海を渡った姫島産黒曜石

姫島は国東半島の北方5kmに位置します。姫島西端の^{かんのんざき}観音崎では約34万年前の火山噴火により、乳白色を呈するガラス質の黒曜石がつけられました。姫島産黒曜石は、縄文時代から弥生時代にかけて、石鏃等の材料として、九州を中心に西日本各地に流通しました。縄文時代の^{はだいせき}羽田遺跡(国東市)や横尾貝塚(大分市)からは、姫島産黒曜石の大型石核が出土しており、黒曜石の流通を中継した遺跡とみられます。姫島産黒曜石の分布図をみると、西日本の沿岸部を中心に遺跡が分布しています。舟や筏を用いて中継地点まで運び、そこから河川沿いに内陸部へ運ばれたと考えられています。



姫島産黒曜石出土遺跡の分布図



羽田遺跡(国東市) 姫島産黒曜石大型石核
国東市教育委員会 蔵
※重量 12.5kg

横尾貝塚

横尾貝塚は大分市の乙津川左岸、鶴崎台地東麓の緩斜面上に位置しています。縄文時代前期・中期の貝塚として有名ですが、第82-3次調査では縄文時代早期末葉の水場遺構から2点の姫島産黒曜石の大型石核と、カゴに入った状態の姫島産黒曜石が検出されました。大型石核は重量12.2kg・10.3kgを測ります。カゴに入った黒曜石は69点以上の剝片・石核で構成され、平面台形状に集積されています。こうした出土状況は、黒曜石がどのように運ばれたのかを具体的に示すものとして重要な成果であるといえます。



カゴに入った姫島産黒曜石
大分市教育委員会 蔵
※画像提供:大分市教育委員会



横尾貝塚(大分市) 姫島産黒曜石大型石核
大分市教育委員会 蔵

～丹に込めた祈り～

ベンガラは、酸化鉄系物質を主成分とする赤色顔料^{せきしよくがんりょう}で、採掘地の違いなどによりいくつかの種類があります。先史時代以来、主に土器や建造物に古墳時代には棺に塗られたり、副葬品として使用されました。大分県では、血の池地獄（別府市）や丹生地区（大分市）が代表的な産地として挙げられます。



えんつうじいせき
円通寺遺跡(別府市) 赤色顔料片(褐鉄鉱)
別府大学文化財研究所 蔵



よっかいちいせき
四日市遺跡(玖珠町) 弥生土器 甕

丹を生む地、丹生

大分市の東部に所在する丹生地区は、古来、赤色顔料である「丹」^にが産出することから付けられたとされる地名です。大分市教育委員会による、丹生川坂ノ市条里跡^{にうがわさかのいちじょうりあと}第4地点の発掘調査では、古墳時代の赤色顔料を貯蔵した土坑が、同第13次調査ではベンガラを貯蔵した弥生土器の鉢が出土しました。他にも赤色顔料に関する遺物が多数出土しており、丹生地区と赤色顔料との強い関係がうかがえます。



丹生川坂ノ市条里跡第4地点出土 ベンガラを含む土坑
※画像提供:大分市教育委員会



俯瞰

側面

丹生川坂ノ市条里跡13次(大分市)
ベンガラを貯蔵した弥生土器
※画像提供:大分市教育委員会

鉄～力と技のゆらめき～

鉄は中国や朝鮮半島から伝えられたとされ、日本では古墳時代以降に生産が行われるようになったと考えられています。製鉄には、砂鉄や鉄鉱石といった原料に加え、燃料となる木炭が必要です。

大分県内においても、製鉄に関わる遺跡が複数確認されています。本展示では、古代の製鉄炉が確認された伊藤田田中遺跡(中津市)と、中世の製鉄炉や鍛冶工房跡が確認された国東半島の遺跡に焦点を当てて紹介します。

伊藤田田中遺跡

伊藤田田中遺跡は中津市に所在する、古代から中世にかけての遺跡です。発掘調査では、7世紀後半の製鉄炉(箱型炉)の炉床1基が見つかりました。遺跡の近くを流れる犬丸川で採集した砂鉄を利用して、製鉄が行われていたと考えられています。

また、本遺跡は古代官道に面し、周辺では寺院や官衙などの大規模建築の造営や、須恵器生産といった活動が活発に行われていました。伊藤田田中遺跡は、当時の地域社会において鉄の供給を担う重要な役割を果たしていたと考えられています。



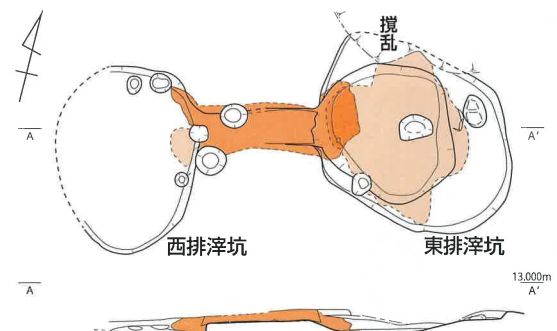
箱形炉を使った作業イメージ図



伊藤田田中遺跡(中津市) 製鉄関連遺物



伊藤田田中遺跡製鉄炉跡(中津市)
箱形炉出土状況



伊藤田田中遺跡の箱型炉
中央の長方形の部分が炉の下底部

鉄の生産が栄えた国東半島

国東半島は古代から中世にかけて九州でも有数の鉄の産地でした。その背景には、製鉄の原料となる砂鉄が豊富に産出することに加え、砂鉄を還元するために必要な木炭を供給する森林資源に恵まれていた点が挙げられます。特に中世の製鉄関連の遺跡が多く確認されています。由井ヶ迫遺跡(国東市)の発掘調査では12世紀後半から13世紀とみられる製鉄炉(竪形炉)の炉床1基が見つかりました。また、原遺跡(国東市)では、12世紀後半から13世紀の鍛冶工房跡が見つかりました。短刀をはじめとする鉄製品や製鉄関連遺物が多数出土しており、中世における鉄の生産・加工の拠点であったことがうかがえます。



由井ヶ迫遺跡1号製鉄炉(国東市) 竪形炉出土状況
※画像提供:国東市教育委員会



原遺跡七郎丸1地区(国東市) 短刀

大友氏と国東の鉄

中世の国東半島では、生産された鉄は守護大名である大友氏に納められていました。正安2年(1300)8月2日の「小松雑掌公祐和与状」には、国東半島における鉄生産の拠点である諸田の人々が、大友一族の志賀氏に年貢を納める際、米の代わりに鋤(くわ)を納めたことが記されています。また、16世紀の大友義鑑書状(年未詳)には、国東半島の岐部氏との鉄の取引に関する記述がみられます。

これら史料から、大友氏が領国内の鉄の生産を掌握していた様子がわかります。さらに、中世大友府内町跡(大分市)からは、鉄製農具が出土しています。これらの中には、国東半島で作られ、府内へと運ばれた鉄製品が含まれる可能性があります。



大友義鑑書状 大分県立先哲史料館 蔵



中世大友府内町(大分市) 鉄製農具(国指定重要文化財)
撮影:牛嶋 茂氏

硫黄が紡ぐ交易の道

硫黄は黒色火薬や医薬品の原料として、幅広く利用されてきました。なかでも黒色火薬の使用が最も多く、燃えやすい性質から特に重要な役割を担っていました。日本では中世以降、鉄砲などの火器の普及に伴い、硫黄の需要が著しく増加しました。

大分県における代表的な硫黄産地として、くじゅう連山いおうざん がらんだけ つかはらなべやまの硫黄山、伽藍岳、塚原鍋山などが挙げられます。硫黄の貿易については、文献史料から日本国内だけでなく、東アジア地域へも輸出されていたことが知られています。

一方、発掘調査で硫黄が出土した例は、全国でも福岡県博多遺跡群はかたいせきぐんと、大阪府堺環濠都市遺跡さかいかんごうとしの2例しかありません。硫黄は土中で分解されるため通常は残りませんが、これらの遺跡では特殊な条件下にあったため、現代まで残っていました。出土した硫黄は硫黄同位体分析により、大分県産の可能性が高いことが指摘されています。



くじゅう硫黄山 ※筆者撮影



おんごのくにはやみぐんつるみちちとうのき
『豊後国速見郡鶴見七湯廻記』(大分県指定有形文化財)
大分県立歴史博物館 蔵

『豊後国速見郡鶴見七湯廻記』は豊後森藩8代目藩主久留島伊予守通嘉が弘化2年(1845)に、鶴見村に設けさせた温泉場照湯の繁盛する様子と鶴見村内の温泉、鶴見七湯の由来と名所旧跡、特産物等を絵と詞で記した地誌です。

今回展示している絵は伽藍岳(由布市)の山貌を描いたもので、硫黄の採集している様子などがうかがえます。

博多遺跡群

福岡県福岡市に所在する、中世初頭から国内や海外との貿易拠点として栄えた港町遺跡です。平成31年(2019)に福岡市教育委員会が実施した博多遺跡群第221次調査では、計61点の硫黄が出土しました。これらの硫黄はいずれも洪水堆積物にパックされ、硫黄を分解する微生物の活動が妨げられたことで、奇跡的に残されました。硫黄の年代は、11世紀前半から12世紀中頃(平安時代)とみられます。

出土した硫黄の同位体分析の結果、大分県の塚原鍋山及びくじゅう硫黄山、鹿児島県の薩摩硫黄島から産出した硫黄の可能性が高いことが分かりました。これらの硫黄は、日宋貿易における輸出品として博多に集荷されたものである可能性が考えられています。豊後での硫黄採集を直接示す文献史料は確認されていませんが、硫黄の出土は、豊後産硫黄が輸出されていた可能性を示す重要な発見でした。



左:博多遺跡群(福岡市) 硫黄(くじゅう硫黄山の可能性が高い)
福岡市埋蔵文化財センター 蔵
右:博多遺跡群(福岡市) 硫黄(塚原鍋山の可能性が高い)
福岡市埋蔵文化財センター 蔵

堺環濠都市遺跡

大阪府堺市^{さかいかんごうとしいせき}の堺環濠都市遺跡は、中世後期に国内や海外との貿易や商業により栄えた都市遺跡です。昭和63年(1988)に堺市教育委員会が実施した発掘調査から、タイのメナムノイ窯四耳壺2点に硫黄が充填された状態で出土しました。出土した硫黄は、周囲の遺物の年代から天正年間(1573~1593)の後半頃に埋められたものとみられています。別府大学文化財研究所による分析の結果、この硫黄は大分県由布市の伽藍岳、九重町の硫黄山付近で形成された自然硫黄とほぼ同一成分であることが明らかになりました。

この硫黄は、豊後で採掘されてから、運搬容器に転用されたメナムノイ窯四耳壺に詰められ、海路で堺に持ち込まれたものとみられます。同時期の豊後では中世大友府内町跡(大分市)が南蛮貿易による国際貿易都市として繁栄しており、豊後府内から堺へ運ばれた可能性は高いといえます。博多遺跡群と同様に、豊後産硫黄が出荷されていたことを裏付ける極めて重要な発見です。



左:硫黄とメナムノイ窯四耳壺出土状況
右:メナムノイ窯四耳壺内の硫黄
※画像提供:堺市教育委員会

貨幣鑄造～岡藩錢座跡と岡藩を支えた2つの鉱山～

江戸幕府は寛永13年(1636)に江戸(芝・浅草)と近江国坂本で寛永通宝の製造を開始し、翌寛永14年(1637)には岡藩の豊後竹田を含む全国8箇所に錢座を設置しました。岡藩錢座での寛永通宝の鑄造は、鑄造停止命令が出された寛永16年(1639)までのわずか3年程度の操業でした。

岡藩錢座跡ではこれまでに数度の発掘調査が実施されていますが、錢座に関する明確な遺構は確認されていません。ただ、^{いざお} 坩堝や砥石、鑄棹など、銅錢の鑄造に関する遺物の出土が錢座の痕跡を伝えています。



岡藩錢座跡に建つ記念碑
※上部に古寛永があしらわれています



岡藩錢座跡(竹田市) 砥石
竹田市教育委員会 蔵

コラム 岡藩錢座跡で出土した寛永通宝を分析する

岡藩錢座跡出土の金属製遺物は、蛍光X線分析という手法で分析が行われました。測定の結果、錢は銅、スズ、鉛の合金である青銅製であることが分かりました。一般的な寛永通宝では、スズの含有率が10%未満のものが多くとされています。しかし、分析の対象とした寛永通宝の中には、スズ含有率が約20%以上含有するものも確認されており、このような比較的高いスズ含有率は、岡藩錢座で鑄造された錢の特徴の一つなのかもしれません。

その背景として、岡藩の管理下にあった尾平鉱山や木浦鉱山といったスズが豊富に産出する鉱山の存在が挙げられます。岡藩錢座では、これらの鉱山から供給されたスズを合金材料として寛永通宝が作られた可能性も考えられています。



大分県で唯一寛永通宝が作られた場所だよ



岡藩錢座跡(竹田市) 分析された寛永通宝
竹田市教育委員会 蔵

炎を生む～火打石と火打金～

ひうちいし ひうちがね
火打石と火打金は、火を起こすための道具です。火打石に鉄製の火打金を打ち当てて火花を発生させ、その火花を縄などの有機質の火口に落とすことで火をつけます。こうした発火方法を打撃式発火法といいます。九州における火打石・火打金は、8世紀に登場し、マッチが普及する近代までの長期にわたって人々の日常的な火起こしの手段として利用されてきました。

火打石は、火種を起こすために石の鋭い稜線に火打金を打ち付けるため、使用を重ねるとその部分が摩耗して丸みを帯びていきます。そこで新たな稜線を確保するために火打石は打ち割られ、やがて廃棄されました。

六太郎角

ろくたろうかどやま
六太郎角山は、杵築市山香町に所在する山で、火打石が採掘されることで知られています。大分市中世大友府内町跡では中世にさかのぼる六太郎角の火打石が出土しており、採掘の開始は中世までさかのぼると考えられています。

六太郎角の採掘量は不明ですが、その販路が「大分の浜の市、西は高田、宇佐、中津、小倉地方」に及び、さらに上質なものは関西地方まで流通していたといわれています。六太郎角の火打石には「味噌」(黄色を帯びた飴色)と「浅黄」^{うすき}の2種類があり、特に味噌は発火が良いことから上物で、高価格だったようです(藤木2025)。



中世大友府内町跡 六太郎角産火打石 (国指定重要文化財)



中世大友府内町跡 火打金 (国指定重要文化財)

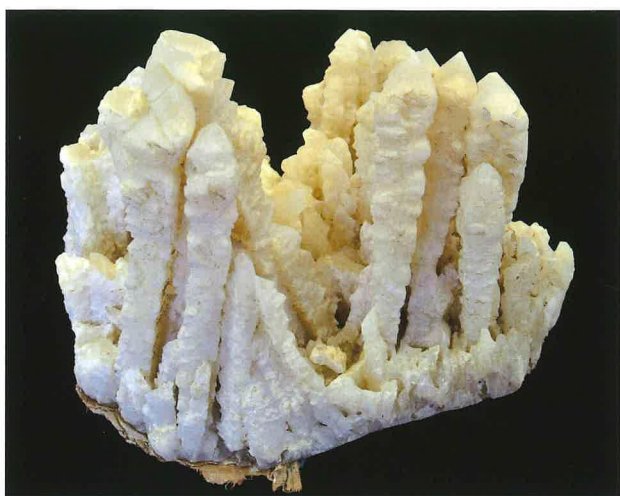


角山 遠景

明礬～白き結晶が秘める力～

明礬^{みょうばん}は、薬用としての止血剤や皮膚の消毒に用いられたほか、染料を反物^{たんもの}に定着させる媒染剤^{ばいせんざい}、皮革のなめしなどに利用されてきました。

明礬は近世以前には中国から輸入されていましたが、江戸時代に入ると国内でも生産されるようになります。豊後では幕府領の速見郡野田村（幕府領）や森藩領の鶴見村（どちらも現在の別府市）が主要な産地として知られています。「書上控」によると、宝暦13年（1763）頃の明礬の国内生産高約20万斤のうち、上記2か村の明礬供給量がともに7万斤で、全国の約70%を占めています。当時の別府は日本最大の明礬生産地であったことが分かります。



明礬原石(別府脇屋家文書)
大分県立先哲史料館 蔵

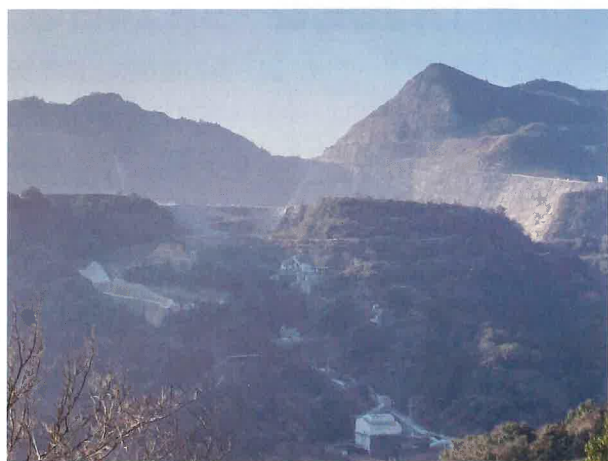


照湯遺跡(別府市) 土管
※内部に湯泉の成分を付着する。

津久見の石灰産業の原点～石灰焼～

津久見市は、石灰石^{せっかいせき}の産地で、現在も津久見市の基幹産業を担っています。石灰岩を高温で焼成して生石灰を製造し、さらにこれに水を加えて加工する一連の技術は、石灰焼^{いしばいやき}と呼ばれています。生産された石灰は、土蔵や城郭の白壁に用いられる漆喰や、畑の消毒などに利用されました。胡麻柄山^{ごまがらやま}一帯における石灰石の採掘は、寛政3年（1791）に始まりました。また、白杵城下畳屋町の吉田屋八十治が小園村で石灰焼を始めたことに始まるとされています。その後、白杵藩は石灰焼の経営に積極的に関与し、寛政8年（1796）頃から津久見の各村に石灰焼窯や石灰小屋が整備されました。これらの施設は藩の直営で運営されました。

現在も石灰焼をはじめとする石灰石関連産業が受け継がれており、津久見市では、石灰石という鉱物資源が過去から現在へと大切に活用され続けています。



石灰岩の山が連なる津久見の風景
※筆者撮影

主な参考・引用文献

- 飯沼賢司 1995「鍛冶の翁」と「炭焼小五郎」伝説の実像—中世の豊前・豊後の金属生産の問題—
『中世の風景を読む 第7巻 東シナ海を囲む中世世界』新人物往来社
- 大分県生活環境部自然保護推進室 2021『大分県の天然記念物(地質鉱物)』
- 大庭 康時 2021『博多遺跡出土の中世初頭の硫黄』『硫黄と銀の室町・戦国』思文閣出版
- 長田 弘通 1998「さかんに産出された各種の鉱産物」『江戸時代人づくり風土記44』社団法人農山漁村文化協会
- 鹿毛 敏夫 2019『戦国大名の海外交易』勉誠出版
- 北野 信彦 2024『ベンガラ塗装史の研究』雄山閣
- 城戸 誠 1997「豊後岡藩(竹田)銭座跡」『近世の出土銭I—論考編—』(永井久美男編)兵庫埋蔵銭調査会
- 国東市歴史体験学習館 2012『国東の歴史探訪—国東半島のくらしと祈り—』国東市・国東市教育委員会
- 島根県古代文化センター 2020『たたら製鉄の成立過程』島根県教育委員会
- 段上 達雄 2023『べっぴの文化財 No.53鶴見七湯廻記—その内容と復元の試み—』別府市教育委員会
- 續 伸一郎 2021「堺環濠都市遺跡から出土した硫黄」『硫黄と銀の室町・戦国』思文閣出版
- 稗田 優生 2018「岡城銭座出土の銅製金属分析における蛍光X線分析」
『岡藩城下町遺跡発掘調査II』〔竹田〕市内遺跡発掘調査10竹田市教育委員会
- 平川 毅 2024「別府指定有形文化財「明礬関係史料」の翻訳紹介」『大分県立歴史博物館研究紀要』大分県立歴史博物館
- 藤木 聡 2025『火打石と火打金の文化史—考古学からみた火起こしの研究—』吉川弘文館
- 豊後大野市資料館ジオミュージアム 2024『企画展 おおいたの鉱物』
- 横澤 慈 2024「大分県における縄文時代生産遺跡・製作遺跡の概要」『九州縄文時代のものづくり』九州縄文研究会
- 吉田 秀享 2023『古代製鉄技術の復元的研究』同成社
- 綿貫 俊一 2024「姫島産産出の石器石材」『九州縄文時代のものづくり』九州縄文研究会

【謝辞】

企画展の開催にあたり、下記の機関に御協力をいただきました(五十音順)。

大分県立先哲史料館、大分県立歴史博物館、大分市教育委員会、国東市教育委員会、堺市教育委員会、竹田市教育委員会、長者原ビジターセンター、日田市文化財課、日田市立博物館、福岡市教育委員会、豊後大野市教育委員会、別府大学文化財研究所

・本企画展の企画・構成及び本書の執筆・編集は古谷悠汰が行いました。

特集展 新発見速報展 2026

令和8年 1月20日(火)～5月24日(日)

大分県立埋蔵文化財センターでは、国や県の事業などに伴う発掘調査を毎年実施しています。本展では、令和6年度に実施した調査で出土した遺物を中心に、県内各地の新発見を速報展としてご紹介します。

主な展示品	セハタ遺跡 —— 工字状突帯文甕、鉄滓、金床石、鉄製品等
	名草台遺跡 —— 東北系土器等
	戸室石丁場跡 —— 陶磁器、白杵藩稲葉家家紋刻印



古代東北系土師器(名草台遺跡)

令和7～8年度企画展
発行/令和8年2月10日

おおいた鉱物資源ものがたり
編集・発行/大分県立埋蔵文化財センター